景観形成の基本原則　２－３　界隈の空気

構成要素（１）機能的でありながら調和した幹線道路の空間

幹線道路沿道は日常の暮らしで車の中から目に触れる機会が多い景観です。車の利用に適した形で機能性が重視される傾向にありますが、隣接敷地や周辺との調和、しつらえや演出の工夫を採り入れ、機能的でありながら一定の調和が取れ、気持ちの良い沿道景観を創っている取り組みも見られます。

沿道空間の連なり

沿道にもそれぞれ景観上特徴があり、それに上手く調和したデザインが期待される。
国道 168 号（北生駒駅付近）茶系のストリートファニチャーが整備され、電線も地中化されており、商業施設が建ち並ぶ中にも落ち着きある沿道景観を形成している。
（菜畑付近）生駒山系、矢田丘陵にはさまれており、広幅員の道路上に街路樹とあわせて民地の緑が連続し、緑がつらなる気持ちの良い沿道景観を形成している。

国道 168 号沿道
【沿道の色彩との調和】
・茶系のストリートファニチャーが整備され、建物の屋根・サブカラーにも同系色が配され、落ち着きを醸し出す。
【スカイラインの連続】
・隣接建築物との関係に配慮した規模を保ち、空が整って見える景観を創っている。

国道 168 号沿道
【緑のうるおいの連続】
・歩道や中央分離帯の植栽が連なり、また沿道の樹木も点景を添え、うるおいある緑のつながりを体感できる。

県道生駒停車場宛木線に接続する道路

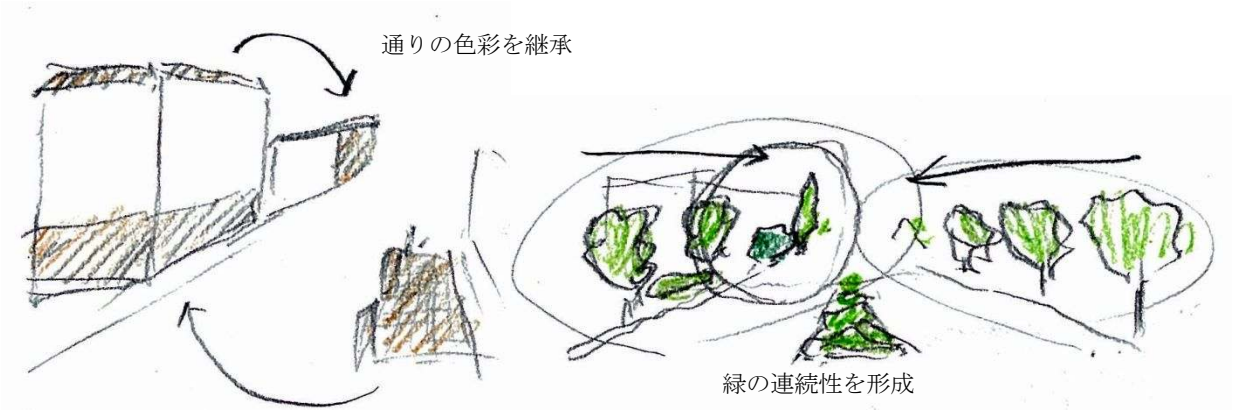
【省かれた要素】

・電線が地中化され、余分な要素がなく、すっきりとした沿道景観を形成している。

・それにあわせて沿道の建築物もことさらに主張することなくなじませた規模・形態・意匠としている。

＊＊＊

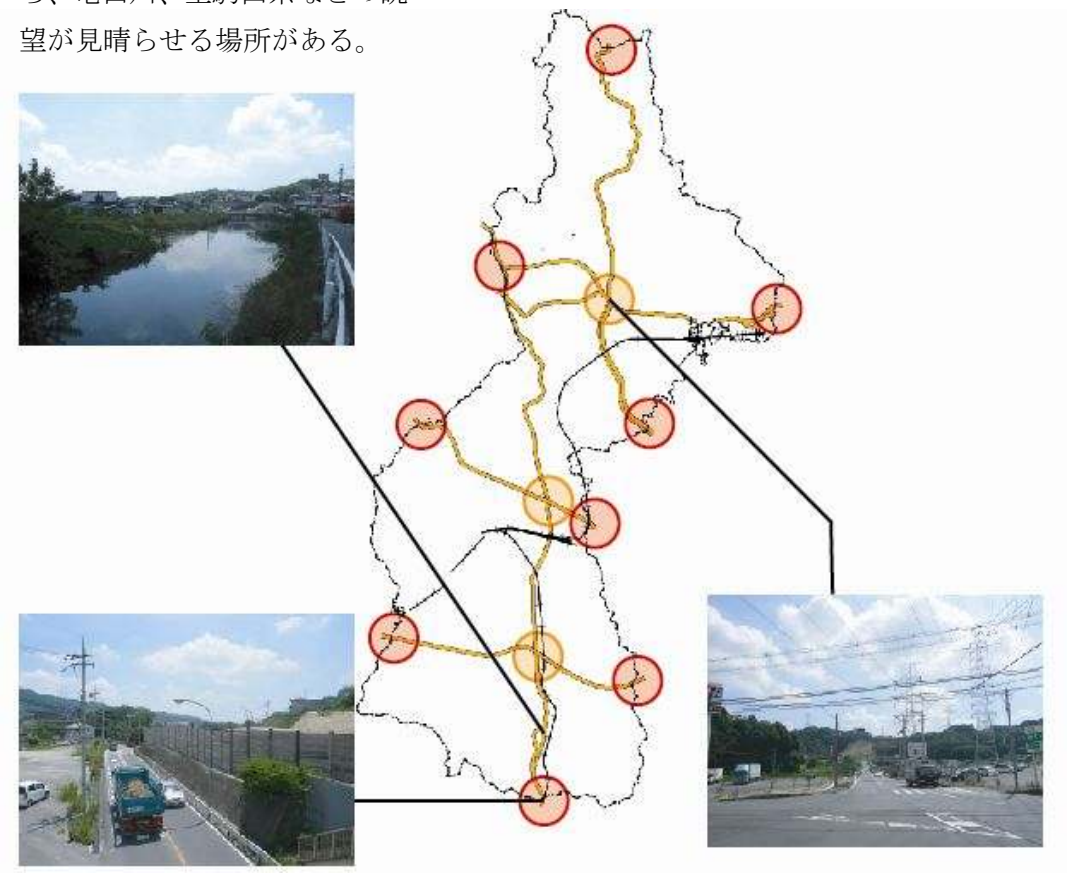
沿道の景観的な特性を読み取り、デザインに反映することで通り全体の連なりを形成すること。沿道の色彩を読み取りそれを建物などにも一部採り入れる、緑が豊かな沿道ではできるだけその植栽が連続するように敷き際に緑を配置する、背後の山なみの見通しが臨める場所では目立たないように色彩を抑える、などが考えられる。



結節点

市域と幹線道路の交わるところ、道路同士が交わるところは、結節点として人の往来があり、来訪者の印象を大きく左右する場所である。

幹線道路沿道の橋の上などから、竜田川、生駒山系などの眺望が見晴らせる場所がある。

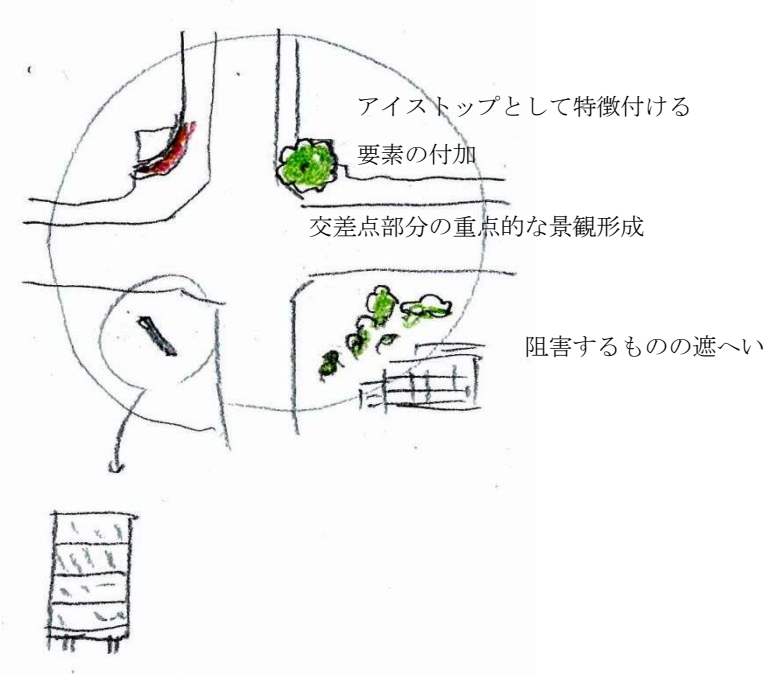


市域と幹線道路の交わるところは、来訪者の印象を左右する。（注：整備中の写真）

道路同士が交わるところは、焦点として人の流れが集中し、印象を左右する。

＊＊＊

結節点において重点的な景観形成を図る。交差点の角を印象的に仕上げるデザインを建築物や植栽において採り入れるとともに、景観を妨げないように配慮する（屋外広告物が乱雑にならないように整える、など）。



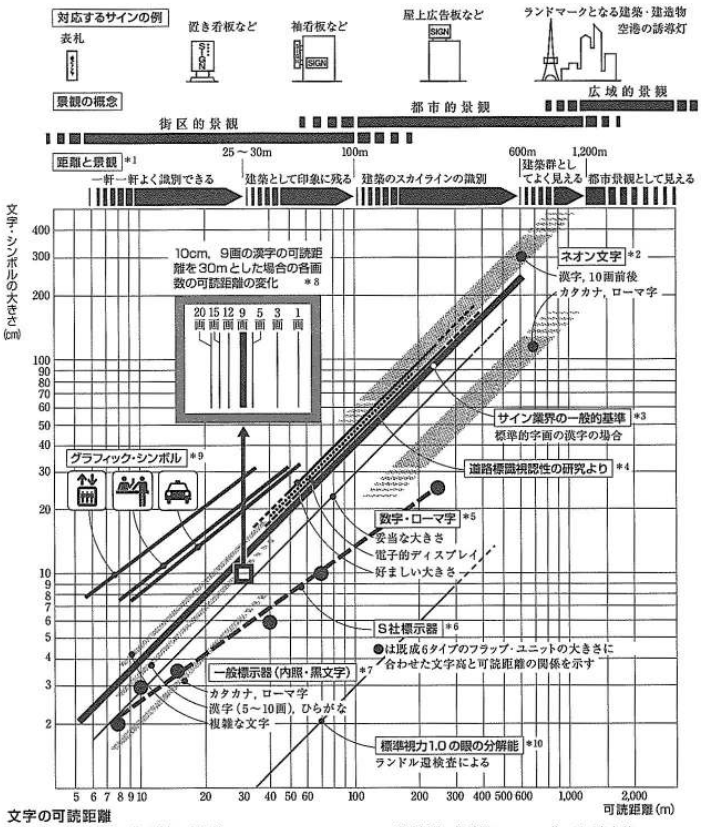
屋外広告物の整理

情報の整理

屋外広告物は得てして突出しやすいが、情報を整理し、かつ景観になじませる作法を採り入れると、通りとしての印象も高まり、結果的に店舗の個性の効果的なアピールにつながっている。

【適切な情報提供】

・過度に突出することなく、自動車からも視認しやすいよう情報量の整理がなされている。
　（過度な情報は見る側も判別できず、景観も損ねる）

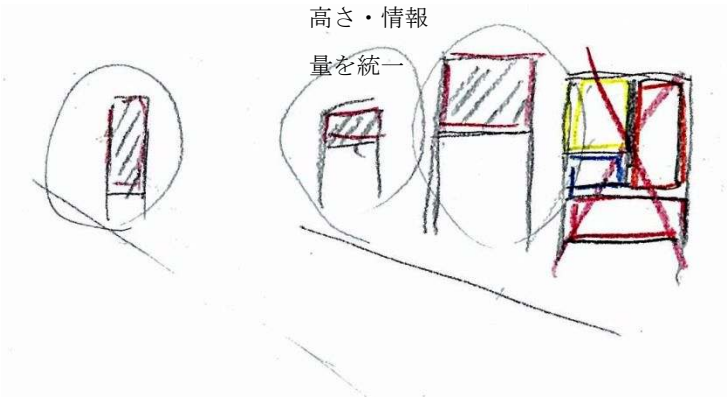


視認性に即して適切な情報量がある。

出典：『屋外広告の知識〈第２巻〉デザイン編』「屋外広告の知識(デザイン)」編集委員会 編

＊＊＊

隣接する店舗等と協調して、屋外広告物を適度に突出させることなく、自動車からも視認しやすいよう情報量を整える。

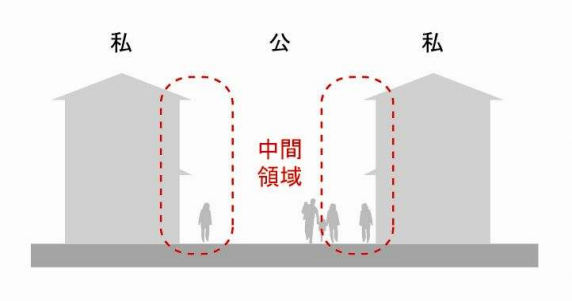


構成要素（２）商店街の親密な空間構成

生駒の商店街は宝山寺詣での参詣道を中心に線状に発展し、旅館など歓待のための店舗が軒を連ねました。現在は地域住民の買い物の場ともなっていますが、往時の業態・たたずまいを色濃く残しています。また、商店が通りに面して様々な演出・工夫を採り入れてきました。こうした作法がにぎわいを形作っています。

販売空間のにじみ出し

商店街の道路（公）と店舗（私）の間の中間領域で、商品を陳列したり、季節感のある飾りや花で演出したり、商店主が客とコミュニケーションを取ったりといった行為がなされており、昔から続くにぎわいの景観として地域になじんでいる。



【陳列】

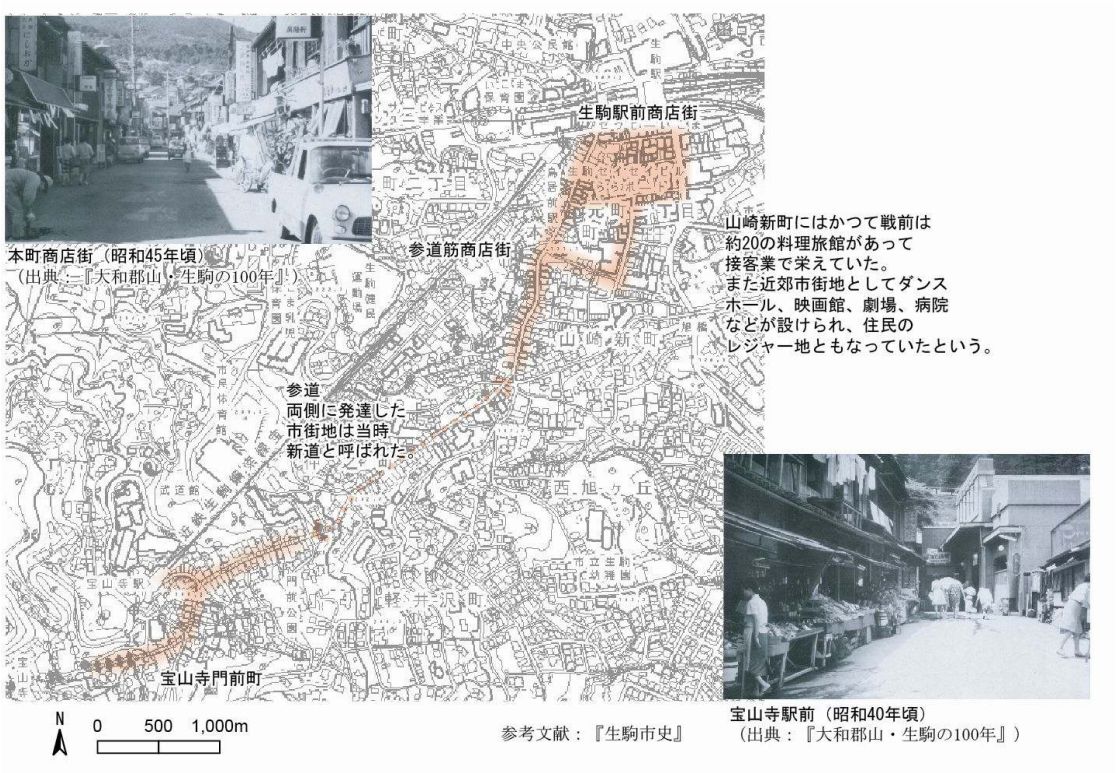
・商品をアピールするために軒先に商品を陳列、顔が見えるコミュニケーションで商品を案内する。

・なかには通りにはみ出しているものもあるが、通りのにぎわいの演出に一役買っており、昔からの商売の風景として地域になじんでいる（次ページ地図上の写真）。

【演出】

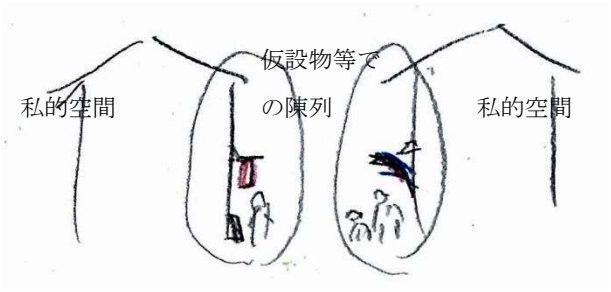
・七夕など季節感を感じる演出や、花などで彩りを添える演出など、商店主が協力して来街者を楽しませる演出を採り入れている。

・統一的な演出がなされると、通りとしての一体感が生まれる。



＊＊＊

通りからの客の視線を意識して、目を楽しませるような陳列を工夫すること。また、季節感や祭りの雰囲気を意識して軒先を飾り、訪れる人を楽しませる工夫を採り入れること。地域の商店街組織を中心に一体的な雰囲気の醸成に努めるとともに、適正に維持・管理されていること。



門前町のたたずまい

幅員 5～6m の比較的狭い道路沿いに軒を連ねた３階建て・瓦葺きの勾配屋根の和風建築の旅館・置屋、花街の名残を残す風情ある看板・街路灯などに趣を感じられる。こうした参詣者をおもてなしする門前町としてのたたずまいがそこここに残っており、現在も継承されている。生駒の歴史性を象徴する景観である。

●宝山寺門前町

・宝山寺縁日等は特に参詣人が多く、門前に茶屋、飲食店や土産屋が開店した。明治以後も一層参詣者の数が増加したので旅館が出現した。

・大正時代に石段が舗装され、参道沿いが市街地となった。

・現在も旅館が各所に点在している。しかし、参詣の仕方も時代を経て変わりつつある。

●参道筋商店街

・元町１丁目は土産物店や飲食店など宝山寺参詣人の店が多く、続いて観光サービスの料理、旅館とこれに伴う芸妓置屋などの多い門前町の特色を持っていた。

・現在でもその名が示すとおり参道の空間構成を各所に残しており、たたずまいを継承した店舗も見られる。

【参道のスケール感】

・一部建て替えが生じているものの、沿道の建て詰まり感が当時の参道の雰囲気をよく表す。

【門前町の意匠・看板】

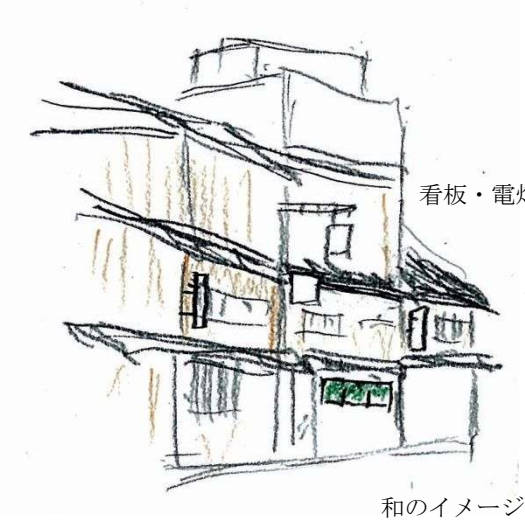
・舞妓置屋があった名残から、大きさや高さ、地色が揃えられたり、ファサードが閉鎖的なしつらえになっていたり、看板の位置が概ね統一されていたりと、一定のルールが感じられる。

・特段に意匠に明文化されたルールがあるわけではないが、老舗の店舗の建て替えで往時の意匠を継承したと思われるものもあり、参詣者をおもてなしする雰囲気が伝わる。

景観形成の基本原則　２－３　界隈の空気

＊＊＊

機能の更新は許容しながらも、通りに残るたたずまいを意識し、そのデザインを継承し、通りの記憶を継承すること。
隣接する和風建築等とあわせた意匠を採り入れたり、テナントビル等においても低層部のしつらえなどを合わせることで、通りの景観が分断しないよう工夫すること。



和のイメージを採り入れる（のれんなど）

構成要素（３）駅を中心とした日常のゲート空間

駅前は通勤・通学のゲート空間として日々多くの住民に利用されています。日常の景観の印象を左右するという意味で重要な空間であり、駅舎、駅前のデザインのみならず、線路や駅からの周辺の見え方、生駒山系への眺望など、より気持ちの良い空間とするための要素があります。

車窓や駅からの眺望

鉄道の車窓からの眺望景観、駅から降り立ったときの眺望景観を認識して「帰ってきた」という気持ちになる。地域住民にとってなじみの景観であり、生駒らしさを日々感じるという意味でも非常に重要な景観である。

萩の台駅

駅から生駒山系、農地、集落が望める。

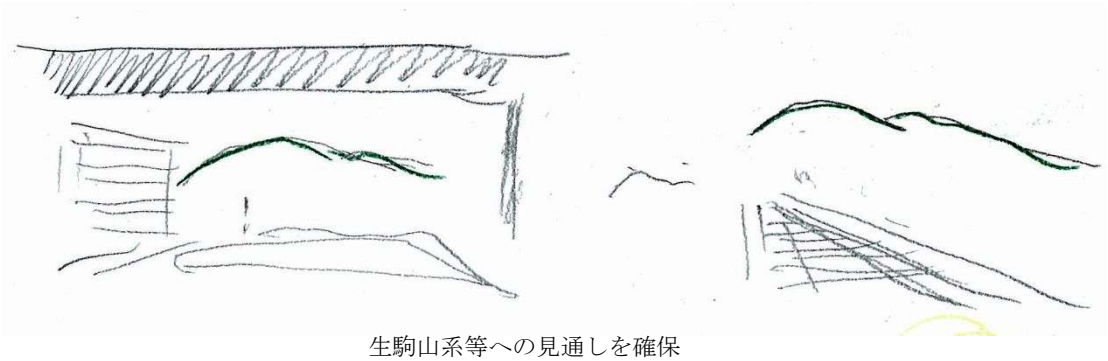
菜畑駅

駅から生駒山系、樹林地、存在感のある家屋が望める。

景観形成の基本原則　２－３　界隈の空気

＊＊＊

車窓や駅からの眺望点（ビューポイント）を重視し、それを妨げる計画としてはならない。見慣れたものが見えるようにすること。
鉄道事業者、地域住民とも協働し、協働による沿線の景観のしつらえ方を考えること。



生駒山系等への見通しを確保

駅前空間の演出

駅から住宅地・集落への接続する空間は、多くの人の目に触れる場所であり、そのしつらえがなじみの印象を左右し、地域の人々の手が加えられ維持・管理された空間は気持ち良く、自分のまちの愛着にもつながる。

壱分駅

・榁木（むろき）越大宮参道と清滝街道の交点、壱分集落の入り口に位置し、近接して庄屋の豪邸がうかがえるが、現在は駅周辺に商店や３階建ての建物、駐車場が集積しており、周囲の農村景観とのギャップが大きく感じられる。

小瀬駅

・小瀬町は暗峠街道と清滝街道の交点にあたり、宿場町の中心として機能した。酒造りもなされている。

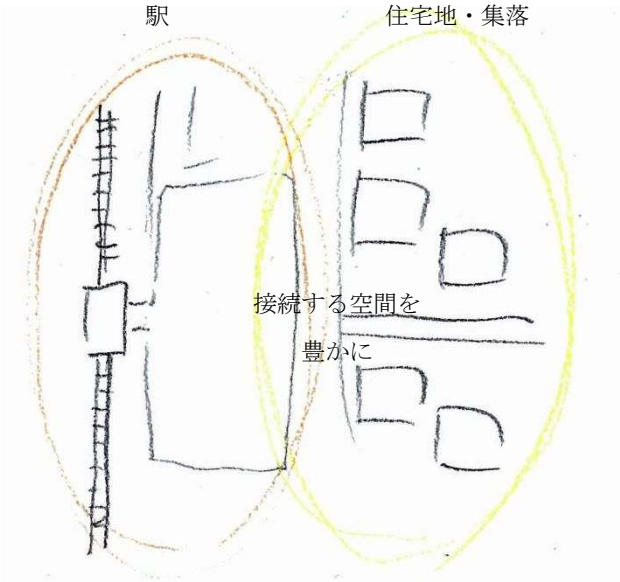
・東側に近年ロータリーが整備され、斜面地に位置する集落や樹林地が望めるが、やや雑然とした印象もある。

萩の台駅

・昭和 50 年代の萩の台住宅地の開発・分譲とあわせて整備され、昭和 55 年に新設。

・駅から階段を上ったところにロータリーが整備されており、隣接して商業・業務ビルも立地。緑が効果的に配されうるおいのある景観となっている。

景観形成の基本原則　２－３　界隈の空気

＊＊＊

駅前空間と接する部分には地域の様子を伝えるメッセージボードを設置したり、季節などに応じてちょっとした演出により変化をつけるなど景観のしつらえを工夫すること。
鉄道事業者、地域住民や面する店舗等によって花や緑のしつらえを施すなど、協働による維持・管理を促すこと。